

# 巻 頭 言

今年は勤務先の大学で久しぶりに新入生担任の役が回ってきました。このため4月から入学式、合宿オリエンテーション、練習船による神戸港見学、学内船舶実習、海洋水泳実習などに出席、同行しています。これらの内、他の大学にないのは、学外で実施の神戸港見学と二つの実習でしょう。それぞれ半日、2日、5日の期間にわたって実施されます。ただし見学を除いて直接の指導は専門教官が担当しますので、担任は同行して学生と面談などによりコミュニケーションをはかるだけです。

実習は新入生にとって初めての体験であり、不安を持っていますので1年生の間は船と海に慣れるが目的ですが、集団生活や連携業務を行う上の基本は指導されます。ここでは海洋水泳実習について触れます。この実習は勿論プールでなく海上で行われ、最終日の遠泳を泳ぎ切った者に単位が与えられます。泳ぎの不得手な学生にとって少し厳しい課題ですが、この実習に先立ってプールで専門教官による指導が行われます。このプールの指導でほとんどの学生は泳げるようになるのですが、海となるとこれはまた別な話であり、足の届かない深いところでは不安になるようです。それ以上に、海では波があり、水温の急変があります。これは少し泳ぎに自信のある人でも厄介です。また、疲労による足のコムラカエリは最も危険です。遠泳に未だ自信がない学生は色々な工夫をして勇気を奮い立たせます。泳ぎ出した元の砂浜に帰ってきたとき、泳ぎ切った疲労の中に安堵と満足の表情を見るのは、担任にとっても感動のときです。今回は所用のため遠泳の出発を見送ってその場を後にしたのは心残りでした。

健康科学の先生によると、水泳実習・遠泳はお互いに励まし合う一体感と、泳ぎ切った時の達成感が得られる大変良い科目の一つだとのこと。この意見に同意しています。教室等で学ぶ座学とは少し異なる学習法です。現在この水泳実習を必修としているのは「航海学コース」だけで、他課程の学生は自由参加です。以前は科目としての「実習」でなく大学行事の「訓練」でした。時代は移り変わっていきますが、何か特色を持つことは必要なことかと思われます。なお、水泳実習にはスキューバダイビングなどのマリンスポーツも含まれており、生涯スポーツを意識していることを付記します。

合宿は何かの目的を持って「一緒に泊まり」、「その実」を上げることでしょうから、色々な合宿がありそうです。「その実」の中に正規時間以外から得るものが多いのが合宿の特徴です。今特集の「学外合宿」はどのような記事が掲載されるのか楽しみです。

副会長 定兼廣行(大学 15 期)

## お知らせ

平成 14 年度同窓会費を払い込んでくださった方で、ご依頼人名が白紙の方がおられました。  
お心当たりの方には 2 重に請求書が同封されていると思われるので、鷗朋会事務局までご一報下さい。

取扱年月日 : 平成 14 年 6 月 17 日(払込金額 : 2,000 円)

取扱郵便局 : 虎ノ門

# 田口賢士先生叙勲祝賀会にて

大学 30 期 三宅 成司郎

このたび、田口先生が多年にわたる船舶システム工学の教育と研究に対する功績により、勲三等瑞宝章を受章されました。平成 14 年 6 月 22 日(土)午後 1 時より、府大の学術交流会館にて田口先生の叙勲を祝う会が行われました。同窓生を中心にご来賓を含めて 78 名の方々が、田口先生のお祝いに駆けつけました。その叙勲祝賀会の顛末のほんの一部を報告させていただきます。

## プロローグ

今年是小雨の梅雨であり、雨の降らない暑い日が続いていました。当日も、照りつける日差しが暑くなることを予感させるいい天気でした。

祝賀会の世話役で司会進行役の岸先生(大学 25 期)によると、会場の空調システムが作動せず、熱気むんむんの灼熱の中でのパーティー開催になるのかと冷や汗をかきながらのパーティー会場セットだったようです。何はともあれ、空調も順調に動きだし会場準備も無事に済み、パーティーは定刻に開催されました。

会場に入ってみると、不思議なことにテーブルと椅子が置かれていました。どうも立食パーティーではないようです。(この椅子の意味は、パーティーが始まって思い知らされることになります。)

## 祝賀会開催

細田先生の開会の辞とともにパーティーが始まりました。田口先生の経歴に始まり、これまでの業績をかいつまんて紹介されました。学内・学外は言うに及ばず、国際的にも多くの業績を残しておられるためでありましょう、いつ果てることもない細田先生の話。それに負けじとご来賓の方々の祝辞、祝辞。祝辞が続きます。(「乾杯は、いつになるのだろうか?まだ、田口先生のお返しのお言葉も残っているぞ。本当の宴会は、ほんまに始まるんやろか?」とやきもきしていたのは、私だけでしょうか?初めから話が長くなるのを岸先生が予想して、椅子を用意されていたようです。立ったままでは、お腹をすかして倒れる人やばてて卒倒する人が出ていたかもしれません。)

ご来賓の浅居名誉教授(経営工学)と桑原農学部長のお二方と室津府立工専校長よりの祝辞を要約しますと、田口先生は船舶工学分野の操縦性能や耐航性能研究という狭い枠に留まらず経営学にも精通していること。それらの経験と知識を通して、学内外で幅広い交流があったこと。それと、仕事に関してはこつこつきちりとやり抜く努力家であること、であったと思います。(40 分ぐらいお預けを食らって頭がくらくらしてましたので、ちょっと記憶があやふやですみません。)

進行の妙によってプログラムを少々変更し、田口先生の謝辞は最後に取りっておくことになりました。そうして、ようやく乾杯・開宴となったのです。

造船3期の保田様の音頭で乾杯した後はおいしい料理を食べお酒を飲みながら、各期の同窓生がお祝いや近況報告などのため田口先生ご夫妻を取り囲んでおりました。同窓生どおしの間にも、思い出話に花が咲いていました。

会場の奥には、勲章と賞状のコピーが、誰もが手に触れることが出来るように飾られていました。勲章は、白を基調に珠玉がちりばめられたカラフルなもので、手に取ってみるとずしつと結構な重みがありました。

歓談の合間に行われたクイズ形式のアトラクションにより、場は盛り上がっていました。その中には奥様にちなんだ問題:「奥様は、何語が堪能でしょうか?」も出題されました。その答えは、スペイン語でした。解答後に奥様には、実際にスペイン語で一言頂きました。田口先生に向けての「グラシャス;ありがとう」に夫婦の絆の深さを見るようで、あやかりたいものだと思います。

## エピソード

大学 33 期の高畑ご夫妻からの花束贈呈が終わり、いよいよ田口先生の謝辞の幕が切って落とされました。それは、「講座のコンパのような祝賀会だったな」という今日の会を大いに楽しめたことを如実に語る第一声から始まったのです。

ひ弱であった子供の頃の話に始まり、講座に赴任された当初、ご自身が思うような活動がなかなか出来ず大変苦労したこと。その中で多くの出会いがあり研究の方向が見え、その苦労が少しずつ花開いて今回の受賞となったこと。奥様のおじいさまもその昔に受賞されており、因縁浅からぬ賞であるというエピソード等々、語り尽くせぬ多くの思い出の一部をお聞かせ頂きました。(しかし、今の恰幅の良さからは、子供時代がひ弱だったなんて想像できませんね。)

途中で奥様の巻きの合図が入りましたが、臆することなく終始堂々と話されました。久しぶりに大学の講義を聞いているようでもあり、一種異様な清々しさがありました。(話す方も聞く方も、これはもう体力勝負です。)

そのお話の中で感じたのは、人との出会いを大切にすることです。節目節目でいい出会いがあり、それをしっかりと育んでいくことが自分の人生に大いにプラスになることを再認識しました。田口先生の場合は、室津先生、細田先生という有能であり奔放な人材を得たために、何をすることも苦労した駆け

出しの頃とは違って、お互いに活発な議論ができて有意義な研究ができたとのことでした。ただ、この二人、ご存じのとおりおとなしく枠内に収まっているような器ではないし、弁が立つ(「屁理屈ばかり言う」とおっしゃっていましたか。)ので、一講座の舵取りには大変苦労されたようです。(田口先生曰く、「はみ出しの魚;桶の中でじっとしていず、隙あれば飛び出そうとする魚。」なるほどなあ。良くわかる。)

大学 10 期の増田鷗朋会会長による閉会の辞で、パーティーは滞りなく終わりました。予定終了時刻の午後 3 時を一時間ぐらいオーバーしていましたが……

田口先生が教育職を退かれて、もう 3 年が過ぎたようです。今後は、イギリスにおける海難についてまとめることやセナクールの随筆の研究などをこつこつとやっつけていかれるとのこと、先生にとってはまだまだ探究心をかき立てる種は尽きないようです。

田口先生、いつまでもお元気でご活躍下さい。これからも迷える同窓生のご指導の程よろしく願います。

発起人の細田先生、増田様、裏方の岸先生や学生さん、写真撮影班の牧野鷗朋編集委員(大学 41 期)、本当にお疲れさまでした。

無礼千万で取り留めのない文章、平にご容赦下さい。

田口 1

**田口先生**

**叙勲おめでとうございます！**

**志知 光佑(大学 6 期)**

**櫻田 幸男(大学 24 期)**

**渡辺 数雄(大学 24 期)**

田口 2

田口 3

# 「学外合宿」概要

大学 35 期 大塚耕司

## 1. 学外合宿とは

学外合宿は、元々「フレッシュマン・オリエンテーション」として、大学学生部が大学同窓会の援助を受けてスタートさせた行事です。新入生に早く大学生活になじんでもらうため、1泊2日で教員や先輩達との親密な交流ができるようにと企画されました。スタートしてからは、他学部を含めて多くの学科がこの企画に参加していたので、ゴールデンウィーク前後の週末には、正門近くに毎週大型バスが何台も並んでいましたが、施設使用料の値上がりに加え、同窓会からの補助も少なくなったことから、現在では合宿を行う学科はほとんどありません。

学1

## 2. 本学科の学外合宿

本学科は 17 年前(船舶工学科の時代)から重要な年中行事の一つとして学外合宿を行っており、現在でも続けている貴重な存在です。当初は三田にある関西学生セミナーハウスを使っていて、OBを招いた講演会やセミナーハウス周辺の山林を舞台にしたオリエンティング大会を行うのが一つのパターンでした。ここ数年は、淡輪にある大阪府立青少年海洋センターを利用するようになり、合宿の内容も各研究室紹介やカッターボート訓練など変わってきました。17年間変わらないのが懇親会で、「新入生が教員や先輩達との交流を一番深められるのはこの時間だ」という信念(?)の下、明け方まで親密な交流を続ける熱心な先生の姿も毎年見ることができます。

## 3. 学外合宿の危機?

本学科の懇親会に対する熱の入れようは学内でも有名です。数年前まで学生部の付き添いがありましたが、担当者の方はなぜか「海洋さんの付き添いですから覚悟してきました」とおっしゃります。また「海洋と同じ日程にしないで欲しい」という他学部(社会福祉?)の要望もあったとかなかったとか。海洋センターで行うようになってからは、ボイスカウトやロータリークラブなどにも知れ渡ることになり、ついに、学外合宿の存続が危ぶまれる状況となってきました。「節度のあるドンチャン騒ぎ」をしっかりと教育し、良き伝統を守りたいと願っているのは私だけでしょうか。

学2

## 海洋・ガクガイガッシュク ーその意気込みや如何に！？ー

田原 裕介

(海洋利用システム工学講座)

けきほう会の皆様。久しぶりに一筆とらせて頂く、海洋システム工学科教員の田原です。今回のテーマは学外合宿だとか。最初にこのテーマを頂いたとき、これは何か懺悔の場でも提供せんとするものか、とさえ感じたほどでした。何しろ、つい先ごろ実施された本会においては少々騒ぎすぎた人間の一人であるわけで。それはともかく、最近になり、自分にとって一種新たな意味を感じ始めた本イベントについて、これは意見を纏めさせて頂く大切なチャンスかもしれません。個人的にヨットハーバーが好き但也有りますが、近年行っている淡輪の施設は結構気に入っております。海洋・学外には伝統的に教員全員が参加して、その歴史も10年以上であるとか。ここで述べさせて頂く一常連客の意見が、皆様のご参考になるものであればこの上なく幸いです。

さて、私が府大に赴任して8年がたとうとしています。それ以前、暫く日本の大学環境から遠ざかっていたからかも知れませんが、赴任当時は新環境でビックリしたり意外であることが多々ありました。実は、本題の海洋・学外は割とインパクトが大きかったものの一つです。本音を申し上げて、私の学生時代において“合宿”と名のつくものにも楽しい思い出は殆どありません。最たるものは高校時代の“剣道部夏合宿”。厳格なコーチに加え、時折やってくる先輩諸氏までがまた只者ではない。合宿というのは地獄を体験することであり、生き残ることが当時我々の人生最大の目的とさえなっておりました。まあ結果的には、その後の県大会団体ベスト8の素地を作り(コーチ談)、かつ幸いに生き残った同輩との間には強力な連帯意識を樹立。たぶん“剣道部夏合宿”は成功していたんでしょうね。当人の意識とは関係なく。

もちろんのこと、海洋・学外において上記地獄の阿鼻叫喚など予測も期待もしていませんでしたが、その目的には少なからず興味を持ちました。何しろ、かような企画は自分にとっては初めてで、かつ大学入学早々の新入生全員が半ば自動的に参加する。同行する新入生諸君のやや不安げな表情を見たりすると、少し気の毒にさえ思えてまいりました。大学環境自体が未知な上、大学の先輩はおろか、先生と呼ばれている人間たちほど怖いものはないのかも。かたや私の方から見れば、

別世代の方々とそれほど身近に接することができるというのが意外で、ふとした会話から感じる彼らの思考法と社会志向には新鮮な驚きさえ感じました。また本心、その有り余るエネルギーに対する羨望さえも。

話は少し変わりますが、大学職には結構やっかいなことが多い反面(やれやれ...)、一つ大きな特典があると思います。それはしばしば学生さんたちから受ける驚愕に近い驚きなんですね。若いのが故に、恐らく本人が意識する以上に驚くべき行動を、場合によっては完璧にこなす。身近な実例で恐縮ですが、ある日何人かの学生さんとビールで一杯やっていて、そのうち誰かがこれから行く病院の話になった。すると、その病院の只ならぬ風評が話題となり、その夥しい数の疑惑はこれから出向く学生さんにとって迷惑至極なほど。やがて彼が受診の時間が近づき席を立つにおよび、私は宿題を出しました。診察中間合いを見計らって担当医に問いただし、今出た疑惑を解明せよと。一時間ほどして帰ってきた彼に宿題の成果を確認してみたところ、残念ながら疑惑の解明には至らなかつたかわり、看護婦さんが可愛かつたので電話番号を聞いて、映画に行く約束までとってきた、それを課題の成果としてください...。そういう行動は私の予想をはるかに超越しており、こちらは恐れ入るしかないわけです。

本題の学外合宿の件ですが、実は本イベントを通して何か

重要なものを得ているのは、主役の新生以上到我々の方かもしれないと、つくづく感じる場合があります。若い人たちのエネルギーと新思考を感じることによって、時にはあきれ、少しは戸惑い、でもそれらが確実に自分にとっていい刺激になっている。本イベントには上回の学生さんも多数参加して、全体を盛り上げようとしてくれる。入学早々、恐らく現在の自分の立場に対する不安と戸惑いで目一杯の新生を励まそうと、結構一生懸命に頑張っている。そういう彼らを身近に見るのも大変頼もしく、加えてそんな空気に徐々になじんでいく新生たちが見せるのは、ちょっとした感動的風景です。実際に、かのような多数参加型のスタイルで本イベントを運営してきたのは、海洋だけだったようですね。運営姿勢の問題かどうかは分かりませんが、昨今他学科は学外合宿を順次廃止する方向に移行して、今でもイベントを慣行しているのは本学科だけになってしまいました。

全くの小生の私見ですが、本海洋システム学外合宿に関しては、ある種“学科文化”の継承を試みる努力の歴史を感じます。その学科文化を私なりに解釈すれば、それは恐らくエンジニアとして“海”に関わる人間たちの文化でしょうか。最近国際会議や共同研究を通し、造船・海運・海軍その他、国内・国外の方々とお付き合いすることが特によくあったのですが、この世界には本当に紳士的な人が多いということを実感します。

要するに、世代と文化の違う人間同士がじかに接した時、相手とその文化に対する敬意を払いつつ、うまく意見交換を

行うという技術を有する人が多いんですね。最近グローバルゼーションという言葉が持て囃されておりますが、“海業界”ではずっと以前からそうであり、かつ場合によって業界人たちは熾烈な自由競争に晒されてきた。このような世界で活躍できる人間は、学科を挙げた教育風潮がなければ育成できないのかもしれない。当学外合宿で新生に伝えたいコンセプトは、世代と環境を超えたコミュニケーションなのかも。あらゆる年代の目上と自由に対話できる敬意と自信、そしてあらゆる年代の目下と自由に対話できる誠実さと寛容。まずはそこから始めましょう、というのが海洋・学外の根底にあるとすれば、随分と観念的にハイレベルな合宿ではありませんか。まさしく当事者たちの意識とは関係なく。

ともあれ、海洋・学外といえば例の大宴会とその後の顛末がとかく話題になりますので、酒文化ではちょっと引けない九州出身者の最後のご意見と懺悔です。まずあの一气飲みだけは些か 트렌ディーじゃないですか。実は初めて本会に参加したとき、時代は世紀末だというのにまだやっとなかい、と半分呆れつつ感心までしたもんです。かの薩摩出身・西郷隆盛が下戸であったのは有名な話で、飲める酒量と人物の大小は別問題。酒は(小生のごとき)好きな人間が勝手に飲んでいれば良く、強制的に詰め込んじゃあ酒に対する敬意が失せる。かたや敬意に関する別件ですが、無礼講という言葉は今でも死語じゃないんですって？(最近は何世紀から引きずる死語が多いとか)無礼講とは、学生さんが先生に無礼になるより先に、私(先生)が学生さんに対して無礼になっていいんだよなっ、と言いつつ誰かを布団巻き寿司にしまった件では100%私が悪い。XX君、あの時はゴメンなさいね、……

学3

学4

私は今回実行委員長として参加させていただきましたが、今年も恒例の学外合宿が無事終える事ができました。それもこれも M1, 有志の皆さんと、手助けして下さいました先生方のおかげであります。どうもありがとうございました。つと、堅苦しい事は抜きにして、学外合宿の内容に関する一般的な疑問①～⑤, それに対する模範的な解答(答A), 海洋システム工学科の解答(答B)を参考にして振り返ってみましょう。

**疑問① 何を目的として学外合宿を行うの？**

答A: 一回生を中心として海洋システム工学科の全人間が打ち解ける事で、より良い発展と向上を促し学科全体を活性化させるため。

答B: 日頃いろんな意味でお世話になっている先生方と学生が同じ時を過ごす間に、お酒という媒体を通して思っているイライラや溜まっている鬱憤をここぞとばかりぶちまけて、今年度一年研究・勉学に打ち込めるようスッキリするため。

**疑問② 野外BBQや懇親会で必要なものは？**

答A: あまり話す機会がない先生方と思い切って話す勇氣と、先輩方と仲良くなるための多少の努力。

答B: ビール, 日本酒, 焼酎, ワイン, ブランデー等々, +おつまみ。

学5

学外合宿の観察日記

大学50期(現M1) 松井友寿

学6

**疑問③ 懇親会ではどんなことをするの？**

答A: 一回生の自己紹介と先生方とのインテリジェンスな会話。

答B: これでもか！っというぐらい飲む。(ちなみに目安は、同じ宿泊施設の他団体に騒ぎすぎてこっぴどく怒られる位)

**疑問④ 就寝時間はいつ？**

答A: 基本的にはパンフレット通りです。

答B: 次の日の朝。もしくは、帰りの電車の中。愚問です。

**疑問⑤ 研究室紹介で得られるものって何？**

答A: 研究室紹介による学科全体の研究内容などの役立つ情報。

答B: アニメーションだらけのパワーポイントによるパソコンの間違った使い方などの少しだけ (?)役立つ情報。

いかがでしたでしょうか。あまり書けませんでした。非常にわかりやすく学外合宿を振り返ってみたつもりです。運営の方は非常に大変でしたが、この学外合宿を通じて一人一人が何かを感じ取り学内生活にこの経験がどこかで少しでも活きるならば幸いです。非常に貴重な経験ができました。



# 学外合宿における思い出

平成 12 年度博士後期課程修了 西川 達雄



私は、大阪府立大学の博士課程に在籍していた3年半(?)の間に、4回の学外合宿セミナーに参加しました。最初の学外合宿セミナーは入学して間もなく、三田の自然豊かな場所で行われました。一回生は基本的に全員参加でたくさんの学生が参加しており、普段一緒に飲む事のない他の研究室の先生や学生、研究室にまだ属していない学部学生と知り合う絶好の機会でもあり、海洋システム工学科全体の雰囲気や垣間見ることができました。また、私は修士課程まで理学部数学科に在籍しており、特に数学科は一人で考える作業が多い特色があると思うのですが、工学部は実験等があり、比較的共同作業が多いと思われ、大阪府立大学の海洋システム工学科は特に学科単位の繋がりが強いなど感じました。学外合宿は修士1年目がいろいろなイベントを主催するなど、学科内での交流を深める学生主体の企画であり、私にとっては理学部数学科的な個人主義を重視する学科より、結束力の強い海洋システム工学科が居心地の良い場所である事を再認識しました。

2回目以降の学外合宿セミナーでは、すでに先生方や学生さんとも仲良くなっておりましたので、皆さんと飲むだけではあき足らず、同じ施設を利用している他大学の学生のなかに混じって、特に女子学生を目当てに突撃した記憶があります。

イベントとしては、2日目に行われる卒業生などによる、社会で活躍されている方の講演を聞くのが楽しみでした。前日に飲み過ぎて講演の時に寝てしまう事も多々ありましたが、川崎重工の岩崎氏や、童夢で車を作っておられる酒向氏など、面白かった講演は、未だに深く記憶に残っています。その他、オリエンテーリングやカッターレース、ラジコンヨットで遊ぶ企画など、自然の中で遊んだのも楽しい思い出です。1年目のオリエンテーリングの後の昼食では、体を動かした後で非常に美味しく感じられたのですが、姫野先生がカレーを3杯もお代わりされていたのには、吃驚した記憶があります。

現在、社会に出て約2年。今当時を振り返ると、たくさんのユニークな生き方をしている方々に出会う機会を与えられたと思います。当時、長い学生生活の中で、自分の将来に関する選択肢は減っている事を常に考えていましたが、一方で学部や修士卒業時には考えもつかなかった生き方を多くの先輩達に教えて頂いたと思います。学外合宿セミナーでも、私なりに貴重な先輩方のお話が聞けたと思っています。

これからも学生に夢を与えることのできるユニークな講演者をたくさん呼んで頂きたいと思うと同時に、将来、自分もそういった講演ができることを夢見て、本文を終わりたいと思います。

## <「鴟朋」第4号への原稿募集>

### ■特集テーマ■ 「祭」 ……大学祭の思い出…

♪お願い♪…大学祭実行委員の経験者等、大学時代「祭」に情熱を燃やしていた方をご存知でしたら、鴟朋会事務局までご一報ください。

※投稿要領については、29ページ(裏表紙裏)をご覧ください。

# 学外合宿の功と罪

～ アンケート調査の結果報告 ～

平成 14 年度学外合宿担当：大学 37 期 有馬 正和

## 1. はじめに

今年のパンフレットを見ると、学外合宿も早いものでもう 17 回目を数えることになった。筆者が昭和 60 年の入学だから、丁度 2 回生の時から始まったことになる。ん!? 確か 1 回生の時は既にあっただ。^^); ... 細かいことはさておき、この学外合宿は、平成 6 年度の「大阪府立総合青少年野外活動センター（豊能郡能勢町）」を除いてずっと裏六甲（神戸市北区道場町）にある「関西地区大学セミナーハウス」で実施されてきた。その後、大学の予算が大幅に削減されたこともあって平成 11 年の第 14 回より泉南郡岬町淡輪にある「大阪府立青少年海洋センター」で実施されるようになり、現在に至っている。以前は観光バスに分乗し、往路は車中で研究室紹介やカラオケを楽しみ、復路は全員が熟睡というのがお決まりのパターンであったが、今では現地集合、現地解散となり、少し味気なくなってしまった。さて、他の記事からも推察されるように、当初より数々の悪事(?)を引き起こし、他学部・他学科から「海洋（一昔前は、船舶）と同じ日だけは勘弁して欲しい」という要望が学生課に殺到するまでに悪名を高めた本学科の学外合宿ではあるが、果たしてその功罪は如何なるものかをアンケート調査の結果に基づいて報告させていただくことにする。

## 2. 学外合宿に関するアンケート調査

このアンケート調査は、本当のことを言えば、今回の学外合宿でも例によって例の如く青少年海洋センターや一般宿泊客にいろいろとご迷惑をお掛けし、こっぴどく叱られたことを契機に行ったものである。周囲に迷惑をかけるような行事は止めてしまえ、という至極ごもつともな意見も出てきた。マイナス面だけを見れば全く反論の余地もないのであるが、新入生がスムーズに大学生活に慣れるように教員や先輩が相談に乗るといふ本来の目的も少しは達成されている筈だという淡い期待を抱いてアンケート調査に踏み切った。

学7

### 1) 平成 14 年度新入生歓迎セミナー(学外合宿)の概要

日 時: 平成 14 年 4 月 27 日(土)～28 日(日) (1泊2日)

場 所: 大阪府立青少年海洋センター(大阪府泉南郡岬町淡輪)

参加者: 1回生 31名, 2回生 14名, 3回生 2名, 4回生 16名, 研究生 1名,

大学院生 16名, 教員 11名

合計 91名

内 容: (1日目)バーベキュー, 懇親会, 2次会 (2日目)研究室紹介, カッター体験乗船

アンケート調査は、今回の学外合宿に参加した学生を対象に行った。調査票の回収率は 71.8%であった。調査の内容

は、目的の達成度や今回の学外合宿に対する採点に加え、施設や一般利用者に対して行った悪行の調査、今後の学外合宿に向けての提案などであるが、筆者に与えられた紙面に制限があるため、ここでは概略に止めることとする。

## 2) 目的の達成度

『学外合宿は、教員や先輩・後輩と親睦を深め、新入生が抱く将来の進路や大学生活への不安を解消することが目的ですが、達成されたと思いますか』という設問に対する回答結果を Table 1 に示す。表中の数字は回答者数で、括弧内は左端に記した回答者数に対する割合を表している。

< Table 1 目的の達成度 >

	とても 良くできた	できた	わからない	できなかった	全然 できなかった
1回生(27名)	3(11.1%)	16(59.3%)	4(14.8%)	3(11.1%)	1( 3.7%)
上回生(23名)	5(21.7%)	10(43.5%)	6(26.1%)	2( 8.7%)	0( 0.0%)
大学院生(6名)	0( 0.0%)	1(16.7%)	4(66.7%)	1(16.7%)	0( 0.0%)
合計(56名)	8(14.3%)	27(48.2%)	14(25.0%)	6(10.7%)	1( 1.8%)

表より、1回生では、『とても良くできた』と『できた』を合わせて 70.3%を占め、『できなかった』と『全然できなかった』の 14.8%を大きく上回っていることがわかる。また、上回生の結果もほぼ同様である。

## 3) 学外合宿の採点結果

『あなたにとって、今回の学外合宿を百点満点で採点すると何点ですか。』という設問への回答結果を Table 2 に示す。

< Table 2 学外合宿の採点結果 >

	100	90～ 99	80～ 89	70～ 79	60～ 69	50～ 59	40～ 49	30～ 39	20～ 29	平均点
1回生(27名)	1	1	7	8	5	3	1	0	1	68.1
上回生(21名)	1	2	5	7	4	2	0	0	0	72.4
大学院生(6名)	1	0	0	2	1	0	0	1	0	66.7
合計(54名)	3	3	12	17	10	5	1	1	1	69.6

※ 19点以下と評した回答はなかった。上回生は、2名が無回答で回答者数が21名。

54名中8名(14.8%)からは「不可」という厳しい点数をいただく結果となったが、概ね学生の評価は高いといえる。

## 3. 今後の学外合宿のために

このアンケート調査の結果より、来年度以降の学外合宿のあり方について以下のようにまとめ、次年度への提案とさせていただきます。

- (1) アンケート調査の結果より、新入生に対して歓迎セミナーを実施する意義およびその効果があると判断できる。従って、来年度以降も続けるべきであると提案する。

しかも、いま海洋システム工学科の評判を落とすことだけは避けなければならないので、

- (2) 利用施設の利用規則を厳守する。
- (3) 他団体や一般利用者へ迷惑をかけない。

ということを絶対的な前提条件とする。

しかし、これまで利用してきた「大阪府立青少年海洋センター」も本年4月より施設利用(宿泊)料金の値上げがあり、来年度以降もこれまで通りに続けることは予算的に困難となってしまった。また、

(4)現在、海洋システム工学科が実施している新入生歓迎行事には、「オリエンテーション」、「研究室見学」、「研究室訪問」、「学外合宿」などがある。

ことを勘案して、来年度の新入生歓迎セミナーは、試験的に「研究室訪問(研究施設の見学を兼ねる)」や「スポーツ大会(ドッジボール/バレーボールなど)」と「(お酒を控えめにした)懇親会」を、学内および近隣で1日(日帰り)で行うことを提案する。

#### 4. おわりに

本学が学外合宿(最近では「新入生歓迎セミナー」が正式名称となっている)を始めた頃は全学的に実施されていたのだが、予算規模の大幅な縮小や施設・一般利用客との問題などのために取り止めることも多く、現在では宿泊を伴う学外合宿を続けているのは本学科だけとなってしまった。施設の利用料金の値上げも相俟って、ついには本学科の学外合宿も大きな転換を迫られることになった。しかし、それでもなお学外合宿(来年度以降、宿泊を伴わないなら「新歓セミナー」とでも呼ばれるのだろうか?)を実施するだけの意義を見出すことができたのは、アンケート調査を行った甲斐があったというものだ。

本稿の表題を『学外合宿の功と罪』として、両方の側面から学外合宿を客観的に批評する目的で書き進めてきたのだが、後者についてはとても書けない(書ききれない?)と判断し、本特集の他の記事に委ねてしまった。そのため、いま読み返してみて、単に言い訳をしているような印象を与えてしまったのでは、という危惧を抱いている。何事においても良い面ばかりでなく、不都合も起こり得るのだから、「功罪相補う」(ここでは「罪はあるが功もまたそれを補うほどあるので大目に見られる。」の意)程度で済ませたいものである。

2002 FIFA ワールドカップ Korea/Japan はブラジルの5度目の優勝で幕を下ろしたが、日本の試合後、数多くの日本人サポーターが戎橋から道頓堀川に飛び込む姿が連日のように報道されていた。開催前は外国人フリーガンの暴挙が懸念されていたが、実際には和製フリーガンと名付けられた若者たちの悪質な振る舞いが目立ち、海外でもニュースになるほど外国人にはとても奇異に映ったようである。熱く、熱く燃えていた韓国のサポーターやヨーロッパ、南米各国のサポーターが川に飛び込んだという話は聞いたことがない。最近の日本の若者は、捌け口のない鬱憤をそんなに溜め込んでいるのだろうか、あるいは発散の仕方を知らないのだろうかとか空恐ろしくさえ感じてしまう。集団でなら、酒の上のことなら何でも許されるという非常に無責任かつ利己主義的な光景にこの国の行く末を憂うのは、筆者が年を取ったというだけのことなのだろうか。

#### <会員の皆様からのメッセージ>

学校出してから45年の舞鶴ライフに終止符をうち、この川西へ転居してきたばかりです。海も無く、船もなし、然し緑は豊富で何か新しい生命を与えてくれるかなと興味津々です。 高松伊三郎(大5)

卒業以来40数年、勤務中は殆んど大阪に住むこともなく、学校とは疎遠になり勝ちでしたが、その中で、私にとって唯一の情報源が“ふね”“鷗朋”でした。今後共よろしくお願い致します。 馬淵正(大6)

元気で老後を送っています。 田所亮三(大7)

本学は大阪府教育委員会、府立高校と連携して、府立高校生等が本学で授業を受けることにより、教育内容の理解を深めてもらうとともに、高校生自らの進路決定への意欲的な取組みを促すことなどを目的として、高校大学連携講座「21世紀の工学研究の最先端」を平成13年10月から試行的に開講し、平成14年1月末に終了しました。この実績を踏まえて、平成14年度も引き続き夏期集中講義として、開催することが計画されています(注)。一方、平成14年度には、高校の先生が、本学工学部諸君に受験科目になかった「生物」の授業を本学で行い、これを受講希望する諸君

が開講され、各専攻・分野の教授・助教授の先生方がわかりやすく講義されました。工学の研究者やエンジニアにしか味わうことのできない、新しい物やシステムを創造する喜び、地球環境や資源・エネルギー問題への挑戦とそれらが社会に生かされ世の中に役立って行く感動の一端を、本学部生・院生の皆さんと一緒に学んで、体験してもらうものでした。また、高校生が机上で勉強したことが実際にどのように生かされていくか、そのおもしろさを実感し、またじっくり人生の方向を見定めるのに役立ててもらおう一助になればとの趣旨で実施したものです。

## 平成13年度 高校大学連携講座

### 「21世紀の工学研究の最先端」

#### の試行を終えて

工学部教育委員会平成13年度委員長

大学12期 岡田 博雄

に高校レベルから勉強し直してもらうことも計画されています(10月からスタート、後期の15週を予定)。

さて、今回の講義(平成13年度)は、高校生が無料で大学の雰囲気味わうことができ、また学ぶ意欲を高めてもらうために、本学部における21世紀の工学研究の最先端を紹介したものです。工学部・工学研究科の機械系、電気・情報系、物質系の各専攻毎に1科目

- ・21世紀の機械系工学研究の最先端  
(月曜日V限目, 12回)
- ・21世紀の電気・情報系工学研究の最先端  
(水曜日V限目, 14回)
- ・21世紀の物質系工学研究の最先端  
(金曜日V限目, 12回)

高校生および本学部生・院生の両方が出席できるよう、各講義ともV限目という時間

に開講したため、本学周辺の高校生の参加が中心でしたが、高校生の皆さんは熱心に受講していました。受講した高校生のアンケートによると、「非常に感動した」、「役に立った」というものがほとんどでした。ただし、半年間という長期にわたるものでしたので、その間には、テストや学校行事などと重複して、出席したくてもできない日も少なからずあったようです。それでも平均して、機械系講座へ15名、電気系へ20

名、物質系へ10名程度の受講者があり、大学生も10名程度の受講者がありました。

平成14年度は、夏期集中講義として、本学から離れた高校生も参加しやすくするように計画されています(注)。

最後になりましたが、講師を担当された先生方には、ご多忙中にも拘わらず講義の準備・実施とともに、レポートの出題、採点など献身的にご尽力いただきましたことに厚くお礼申し上げます。

(注)原稿募集中の7月末から8月頭にかけて、4日間、16コマの講義が実施されました。受講者は、高校25名、大学(学部、院生)約60名程度でした。

# なかもず会講演レポート

大学 40 期 六城 雅敦

H4 年卒不肖のOB六城です。またまた坪郷先生よりなかもず会近況を書けと仰せつかったので報告をさせていただきます。平成 14 年度前期は六月をもって終了いたしました。後期は九月を予定で再開する予定です。そのときはメーリングリスト(Kamome)やホームページ(<http://osakapref.hoops.livedoor.com/>)でお知らせします。では前期はどのような内容だったかというと・・・

## ■第 65 回 H14.3.14(木) 三尾 興太郎氏

(工応 41 年卒・三菱電線工業株 取締役)

### 「クルマの情報とネットワーク」

三菱電線工業株の社長は阿島俊一氏(金属37年卒)です。近未来の自動車のイメージを話していただきました。ご存知かもしれませんが、三菱電線工業は車のハーネスとよばれる部品を供給しているメーカーだそうです。高速道路の料金システムからは自動運転の話などです。会場(東京国際フォーラム)の隣に会社があるのでなにかと無理言ってお願ひしています。

## ■第 66 回 H14.4.25(木) 巽 孝夫 氏

(工化 48 年卒 株関西新技術研究所 主任コンサルタント)

### 「燃料電池の歴史と現状」

シェル石油を経て大阪ガスの関連会社で技術コンサルタントをされている巽氏の講演でした。燃料電池の種類や内部構造、技術的問題点をお話くださいました。ガス会社が電気を供給したり、電力会社が電話会社になったり、どないなつてまんねん！ちゅう話ではありませんでしたけど。身近なコンビニで実際に稼働している設備があるそうです。ちなみに水泳部出身の現役バリバリのスイマーで虎キチの先輩です。

## ■第 67 回 H14.5.30(木) 南 順三 氏

(経済 52 年卒 日立投資顧問株 シニアヴァイスプレジデント)

### 「日本版401K がスタートして」

日立グループの資金運用会社にお勤めの南氏が講師です。

日立グループは企業年金として日本版401Kを導入した企業ですが、日本版401K と本家アメリカとの違い、今後の企業年金の姿の予想をお話くださいました。

いまの日本は米国の401K 導入時とよく似ているそうで、従来の確定給付型年金から確定拠出型(いわゆる401K)年金に変わっていくことが予想されるそうです。

南氏は資金運用から導入教育までされている方でお話がわかりやすく、会社に勤められている方には広く聞いてもらいたいと思いました。ファイナンシャルプランナーとして私も勉強中で兄貴分として慕っております。

## ■第 68 回 H14.6.20(木) 和手 信泰 氏

(航空 45 年卒 株日本総合研究所 ネットコマース本部支配人)

### 「人材の活性化とナレッジマネジメント」

ナレッジマネジメントというとコンピュータを売るための言葉だと思っておりましたが見事に裏切られた内容でした。

ナレッジ(Knowledge)の定義からお話が始まりました。コンピュータの利用の歴史と重ね合わせるとわかりやすいのですが、Data がありそれを Information にし、さらに人間が Information を元になんらかの行動をしたことで Knowledge となる。ここまでが広義の「情報」という意味だそうです。Knowledge から Intelligence へ昇華させるには「自己本位」の思考を加えていかなければいけない・・・と 100 年前にロンドンに駐在していた夏目漱石が悩んでいたという事実をご存知でした？

話は夏目漱石から中国の科挙制度の変遷にまでわたりました。

以上が前半の内容です。どうです、大人の教養としてはとても贅沢じゃありませんか？

お仕事が大切なものわかりますが、一月に一回夕方7時から2時間程度、先輩方のお話に耳を傾けようじゃありませんか。私がホスト役ですので、お気軽にお越しください。

ホームページで活動内容を公開しております。こんな話を聞きたいとか、あの先輩のお話を聞いてみたいという要望があればお聞かせください。後期のなかもず会はどんなテーマがでてくるか楽しみにしててください。

<http://osakapref.hoops.livedoor.com>

社会はたしかにインターネットで便利になりました。聞いたところ世界に散らばるパソコンの能力の合計はスーパーコンピュータの何千倍何万倍と聞いたことがあります。事実アメリカNASAではインターネットでつながっている家庭の遊休パソコンに処理を分散して成果をあげているそうです。個人主義の時代といわれますが、大阪府立大学OBの我々も同様に少しの能力を出し合えば、全体でとほうもない潜在能力を発揮するものと信じております。

船舶工(海シス工)同窓のみなさまにお願いがあります。これからも一言だけでも同窓の先輩後輩方になかもず会を紹介していただきたいのです。たとえば電子メールの末尾にでもなかもず会のURL (<http://osakapref.hoops.livedoor.com>) を載せていただくなどです。なかもず会を今後も継続し、さらなる発展にぜひご理解ご協力をおねがいします。

それでは、東京国際フォーラムでお会いしましょう。

シリーズ / 今、大学は

## 大学の独立行政法人化について 2

北浦 堅一(海洋利用システム講座)

大学の改革も設置者案が示されて大詰めである。8月中に大学改革基本計画が公表されるスケジュールになっている。内容は女子大との統合で5学部を作り、その後看護大学と統合を行い最終的には6学部になる予定である。府立大学にとって一番重要な時期なのに教職員はもとより学生の間でもあまり話題となっていない。この沈黙はあきらめなのか情報不足のどちらかである。昭和40年頃から45年頃まで続いた大学紛争の一番に槍玉にあがったのは産業との共同研究であったが大学改革では、企業との共同研究を積極的に推進している。またそれが社会貢献だと言い切っている。教育を無視し、長期展望を持った基礎研究を無視している。

大学の社会貢献はこのようなものではなく社会で活躍できる

ように高度な知識や豊富な経験そして倫理観を持った学生を卒業させる事である。設置者指導の改革案の素案を見る限りでは予算の減額と人員の削減が達成できれば改革ができたと思っているような案である。ちなみに13年度の大学の人件費を含んだ予算は約176億円でこの額の1/3を削減したいらしい。大学が大阪府のお荷物だとゆわんばかりである。また最近工学部の物質系建物の建設話があるが1/3の資金捻出で大学のキャンパスを切り売りする話が進んでいる。これも行政指導である。もう府立大学には大学の自治が存在しないのか？一層大阪府ばかりに頼らず大学に理解もあるスポンサーをさがす方が府民に理解される大学が生まれるかも知れない。

『航跡』 — 船匠たちから次代への伝言 —

発行: 関西造船協会 頒価: 5,000 円



本書は今年で創立 90 周年を迎えた関西造船協会が、その記念事業の一環として出版したものである。記念出版という年鑑的な性格のものが少なくないが、本書はそれらと一線を画する内容となっている。すなわち、サブタイトルにもあるように“残しておきたい先輩技術者体験談”として教育、営業、研究開発、設計、製造、検査、保船など様々な分野で戦後の我が国における造船業の発展に関わった人々の個人的実録を苦心談、失敗談を交えながら綴っている。

執筆者の一人でもある編集委員長、三宮一泰氏の「造船復興期で汗したことは自ら誇りに思っているけれど、最盛期を過ぎたような現在では何も後輩に遺すことが出来ていないとの自戒の念であった自分を再び奮い起こす」との言葉に代表されるように 43 編 354 頁に及ぶ熱意溢れる文章が寄せられている。前例のない船種、スケール、工法などに取組み、立ち上がった様々な難問に立向かう様は単に仕事と片づけるには余りあるものがあり、今の自らと照らし合わせて逆にこちらが自戒の念にとらわれる一方で、大いに励まされる。また、今では常識となった技術の誕生から育成、実用化にいたる“生立ち”を知る上で、大いに参考になる。

本書には、賜朋会の会員諸氏も寄稿されており、その一部を簡単にご紹介しておく。

— 水槽試験の変遷 — 岡本 洋(造 4)

戦後一貫して川崎重工で船型改良・開発に携わり、明石船型研究所の創設・運営に注力された筆者が設計の立場から如何に水槽を利用したかという趣旨の下に経験事例を中心に述べられており、船の性能向上に水槽の果たした役割が簡潔にまとめられている。今では見慣れたPCCも当初はその大きな

風圧側面積故に直ぐには受け入れられず、具体的な裏付けを水槽試験を通じて確認した末に実現したこと、“線図感”として一般に“バッテンが書いた線図や数式が書いた線図”が多いとの憂いや“Scale Effect”における残された課題など、初めて知る事実と共に次代に対するメッセージが込められている。

— 川筋の造船屋 名村源之助翁の足跡 — 杉山和雄(大 12)

名村造船所の創業者、名村源之助の一代記である。昔から“千三つ”という言葉があり、かつて大阪の川筋に林立した造船所が延べ千社あったのかは定かでないが、佐野安、藤永田などと共にこの内の“三つ”に入った勝ち組の足跡として興味深い。日本の鋼船建造技術が未熟であった頃に裸一貫から“造船屋”を始めた、今流に言えばベンチャー起業家でもあろうが、本文を通じて知る源之助翁の信念、決断力、行動力など並外れたものがある。昨今、曲り角に立たされた日本の企業に“経営品質”が求められているが、その半ばマニュアル化されたガイドランスと翁が身をもって示した経営姿勢が、さほど違和感無く重なり合うように思われてならない。

なお、本書にはライバル佐野川安太郎翁の一代記も掲載されており、両者の対照も興味深い。

— ISO/TC8(船舶および海洋技術)のことをふりかえる —

田口賢士(造 3)

船舶および海洋技術に関わる国際規格の作成・維持を担当する ISO の専門委員会 TC8 の常任議長として活躍された 6 年間(1989～94)の経験を披露されている。造船不況の煽りで沈滞気味であった委員会の再建という課題を引継いだまま、任期中に東西冷戦の終焉を迎えるという一大転換期であった。



参加国／組織の政策、事情、思惑など各々異なる中で、自己の国家的見地を離れた純粋に国際的な立場での行動が求められる議長はある意味で孤独であり、個人の間人関係と経験（もちろん語学力も）が求められる。文面からはその複雑さ、厄介さがひしひしと伝わってくる。反面、その過程で信頼関係が育って行くこともまた見て取れる。別稿で宮崎晃氏が「日本は造船大国ではあったが海事産業のリーダーたり得なかった」と残された課題を示唆されている。また、昨今、必ずしも有利に

展開しない国際問題と沈滞傾向の経済情勢を契機に国際化が叫ばれていることを思うにつけ、貴重な経験談といえる。

以上の他、“関西流体力学研究会(KFR)32年”(姫野洋司(本学教授))などがあるが、紙面の都合で割愛させていただく。過去を知り、明日の糧とする上で有益な1冊である。

(大学30期 竹田 太樹)

(本書の購入は、  
関西造船協会事務局<TEL・FAX(06)6879-7593>まで)

### ●お詫びと訂正●

「鷗朋」第2号(2002年3月発行)において誤りがありました。

下記のとおり訂正するとともに、治郎丸様ならびに鷗朋会会員の皆様にお詫び申し上げます。

16 ページ図書紹介『ある「へそ曲がり男」の落ちこぼれ日記』において、

**次郎丸 銀一 著**となっておりますが、正しくは **治郎丸 銀一 著** です。

### <会員の皆様からのメッセージ>

定年退職後年月も過ぎ、11月の誕生日には78歳になる。現在も無病なのが一番幸いで、厚生年金受給者協会のハイキング行事(厚年歩こう会一月2回)に参加して健康第一の余生を楽しんでいます。

木村弘(造1)

去る昭和47年、満46歳無段より始めた癖だらけの剣道、昨年75にて挑戦32回目、満10年余りの末、ようやく7段に合格、自他ともに不器用ぶりに呆れています。

治郎丸銀一(造2)

岡山中百舌鳥会(大阪府立大学卒業生県内在住の親睦会)の世話役をさせていただいております。県立大学学長 本田和男先生はS28年金属科出身です。又、岡山大学、県立大学、理科大学に多数の本校卒の先生がおられます。たのしい限りです。

福島義倫(大5)

卒業後は主として造船現場で高速ライナー、コンテナ船、自動車運搬船、客船、フェリー、潜水艇、潜水調査船等収集雑多な船の建造に携わって30年と6ヶ月。その後は船級の検査員、ISMの審査員として9年。今だにアフロートでの検査、審査、造船所での新造船修繕船の検査を元気にやっています。

米田勲(大11)

別に薦めた訳でもないのに、今春から孫が後輩になった。学校の様子を聞いても全然ピンと来ない。50年もあの木造の校舎建てる筈ないやね。

山本清左エ門(造2)

今年(平成14年)3月堺市に行く所用が有り、途中府大の前を通りましたが、恐らく50年振りに見る母校、すっかり立派な景観に変わってしまいましたが、当時水槽があった所はその面影を残して居り、なつかしく感入でした。皆様いつまでも御活躍の程お祈り致します。

寺井仁郎(造6)

私は船舶工学科を出ましたが、石川島播磨重工業(株)では、本四架橋・沈埋トンネル・海洋構造物・東京湾横断道路等のプロジェクトに携わり、退職後は、土木のコンサルタントに勤務しています。

志知光佑(大6)

増山さん、松浦さんのお話は懐かしく読ませて頂きました。私も至誠寮でお世話になりましたので。今の不況を突破する一書として『常勝の法』をご一読下さい。必ずヒントが見つかりますよ。

樫田幸男(大24)

日時:2002年6月22日(土)10:30~12:00

場所:大阪府立大学学术交流会館

出席者:増田会長(大 10), 定兼副会長(大 15), 奥野副会長(大 17), 田中(造 3), 保田(造 3), 片岡(大 2), 木村(大 4), 岡本(大 5), 金田(大 5), 大野(大 8), 城野(大 8), 松岡(大 9), 磯川(大 10), 岡田(大 12), 杉山(大 12), 吉久(大 13), 西田(大 17), 岩崎(大 20), 向井(大 23), 三宅(大 30), 大塚(大 35), 吉野(大 36), 有馬(大 37), 山田(大 37), 坪郷(大 39), 片山(大 41), 牧野(大 41), 中谷(大 45), 福川(大 49), 鈴木(大 50)

以上 30 名(敬称略)

新事務局紹介:理事会に先立ち, 新事務局の前川めぐみ氏が紹介された。

会長挨拶:増田会長より挨拶があった。また, 奥野副会長より理事会後の田口先生叙勲祝賀会の案内があった。

議長選出:定兼副会長が議長に選出された。

議事:

(1)報告事項

a)平成 13 年度会計報告

山田会計理事より資料に基づき平成 13 年度会計報告および監査報告があり, 昨年度支出が多かったのは総会が開かれたからであること, 会費納入率は例年どおりであることなどが説明された。

b)全学・工学部同窓会報告

岡田理事より資料に基づき全学および工学部同窓会の報告があり, 創立 50 周年記念事業の柱は, ホームページとデータベースの充実であることなどが説明された。

c)編集委員会報告

岩崎編集委員長より資料に基づき編集委員会活動について報告があり, 今後の鷗朋の特集テーマについて理事からも意見を出していただきたいとのお願いがあった。

d)その他

坪郷理事より資料に基づき現メーリングリストの運用状況について報告があった。

(2)協議事項

a)平成 14 年度会計予算案に関する件

山田会計理事より資料に基づき平成 14 年度会計予算案が提案され, 一部訂正の上承認された。また, 財政状況悪化の見通しに関連し, 会費の値上げ, 会費納入率アップ等の方策を学内理事を中心に検討することとなった。

b)監事交代に関する件

大塚会務担当理事より, 外山監事(造 4)が退任し, 後任に城野理事(造 8)を推薦する旨提案があり, 承認された。また, 西山理事(造 2)より退任希望があることが報告され, 炭田理事(造 2)と相談の上承認することとなった。

c)新理事推薦に関する件

有馬会務担当理事より, 新理事として大船氏(大 50)と鈴木氏(大 50)を推薦する旨提案があり, 承認された。

以上

<会員の皆様からのメッセージ>

卒業以来初めての第1期生の第1回同窓会を昨年有馬温泉 1泊2日で開催, 11名が参加したのに続き, 本年5月倉敷1泊2日で開催, 8名が参加しました。来年は卒業後満50年記念同窓会を宮崎2泊3日で行うと決め, 現在準備中です。まだ現役で働いている者もあり, 顔を合わせる度に若返っていく様で, 在学中の悪行を語り合い思い出にふけています。昭和28年卒業時と学校の様子も変りましたが, 鷗朋会と共に益々の繁栄を希っております。

池島暉(大1)

中百舌鳥を巣立ったのがほんの10年一昔前ぐらいの感覚なのですが, 早や還暦を迎える歳が接近して来ております。皆様がよく言われておりますように, ここを人生の折り返し点とするならば, 2060年を目処に長生きしてみたいと思っています。それは遺伝子DNA端末テロメアを大切に生きていけば120歳ぐらいが「天寿」となるそうです。母校の諸先生方及び会員皆様のご健勝をお祈り致します。

山下眞夫(大16)

現在, 福岡県宗像市溶融炉というごみ処理場建設工事に従事しております。

北田一徳(大42)

平成 13 年度会計報告書

(H.13.4.1-H.14.3.31 単位:円)

収入の部		支出の部	
前期繰越	2,384,071	振込手数料	37,330
同窓会会費	1,366,000	通信費	309,761
理事会会費	23,000	役員費	905,500
寄付	6,806	会議費	128,832
利息	33,047	事務費	82,489
		印刷費	560,642
		備品費	156,660
		雑費	2,156
総会参加費	385,000	総会費	666,682
小計	1,813,853	小計	2,850,052
		次期繰越	1,347,872
合計	4,197,924	合計	4,197,924

平成 14 年度会計予算案

(H.14.4.1-H.15.3.31 単位:円)

収入の部		支出の部	
前期繰越	1,347,872	振込手数料	56,000
同窓会会費	1,600,000	通信費	455,000
理事会会費	25,000	役員費	727,200
		会議費	140,000
		事務費	60,000
		印刷費	385,000
		備品費	50,000
		雑費	3,000
		予備費	0
小計	1,625,000	小計	1,876,200
		次期繰越	1,096,672
合計	2,972,872	合計	2,972,872

会計監査

大阪府立大学工学部  
 聴朋会 殿

監事 外山 嵩  
 江川 尚志

平成 13 年度の同窓会会計につき  
 まして、監査の結果、適正に管理運  
 営されていることを確認いたしました  
 のでご報告いたします。

平成 14 年度分 会費納入のお願い

同窓会費をまだお送りいただいていない方はできる  
 だけ早く同封の振込用紙にて納入下さいますようお願い  
 申し上げます。(平成 14 年 8 月末日現在で未納の方  
 には請求を同封しておりますのでご確認ください。)

毎回催促がましくご請求申し上げ誠に心苦しいので  
 すが、何分本会は皆様方からの会費のみで運営いた  
 しております。なにとぞ御協力のほどよろしくお願い申  
 しあげます。

<会員の皆様からのメッセージ>

昭和 42 年卒業大学 15 期生のみなさんお元気です  
 か。同窓会を開いてはと思われる方、お電話下さい。  
 私も協力致します。

岩崎徳次(大 15)

2005 年開館予定の呉市海事博物館(仮称)のことを手伝って  
 います。造船技術に関する貴重な資料の情報があれば 呉市海  
 事博物館推進室(Tel. 0824-25-3017)に連絡いただければ幸  
 です。

仲渡道夫(大 2)

**博士論文** (博士後期課程)

(指導教官)

- 佐野 淳 (岡田) : 移動体の衝突に対する構造物の応答と強度に関する研究  
 高橋 滋彦 (細田) : 国際港湾をめぐる開発計画の変遷と展望に関する研究  
 呉 念東 (奥野) : 沿岸域環境モニタリング手法の開発に関する研究

**修士論文** (博士前期課程)

(指導教官)

- 会田 晋介 (奥野) : 沿岸海域における流場の画像計測に関する研究  
 荒井 康介 (馬場) : 放射状に広がる海洋重力流の挙動に関する基礎的研究  
 新井 励 (溝畑) : 沿岸域における栄養塩の連続計測に関する基礎的研究  
 安藤 準 (細田) : 表情による感情・心理状態の計測・評価に関する研究  
 大西 暢之 (姫野) : フルスケール自航シミュレーターの構築に関する研究  
 岡本 公一 (細田) : 大阪湾に流入する河川からの汚濁負荷量の要因分析  
 奥坂 泰弘 (姫野) : 実船スケールでの摩擦抵抗値の再検討  
 加茂 知子 (池田) : 浸水中間段階における損傷船舶の安全性に関する研究  
 塩谷 淳 (大塚) : 生態系モデリングによる人工潟湖の水質浄化効果予測  
 杉本 創 (姫野) : CAD・CFD・最適化手法を統合した船型設計システムの開発  
 高橋 努 (岸) : 格子 Boltzmann 法による粘弾性流体の解析  
 坪井 雅人 (岸) : ホバークラフトという空間—内部空間からのデザイン—  
 手嶋 晃 (池田) : 高速滑走艇の斜航時横ポーポイジングに関する基礎的研究  
 寺田 芙美 (奥野) : 主成分分析を用いた大阪湾の環境特性に関する研究  
 内藤 直樹 (岡田) : 浮体構造の流力弾性挙動に及ぼす空気層の影響に関する研究  
 中野 徹 (岡田) : 緊張係留式没水平板の流力弾性挙動に関する研究  
 西澤 智 (正岡) : 初期不整を有する防撓板の圧壊強度推定式の構築と信頼性設計への適用に関する研究  
 松本 吉倫 (大塚) : 海洋深層水大規模取水—分配システムの研究— 経済性評価と CO<sub>2</sub>排出量を指標とした LCA—  
 山崎 祥司 (大塚) : 海洋深層水放流海域における藻場生態系モデルの構築  
 山本 和由 (馬場) : 海洋環境シミュレーションのための拡散凝集モデルの基礎的研究  
 林 豪 (姫野) : マルチブロック NS/RaNS 法を用いたアメリカ杯レース艇のダウンウインドセールの性能評価に関する研究  
 坂口 陽一郎 (田原) : 平板境界層に置かれた円柱突起まわりの流場と熱伝導に関する数値計算的研究

新井 励 君は  
 海洋システム工学分野  
 優秀論文賞 を受賞

卒業研究テーマ

(指導教官)

- 大船 悠 (姫野) : SQP法を用いたコンテナ船の最適主要目の考察
- 桂樹 哲雄 (馬場) : 重力流の発達における自己相似段階への遷移に関する研究
- 金森 泰昌 (奥野) : 海色の分光特性を利用した画像計測 — 時間変動特性の検討 —
- 川又 伸一 (岡田) : 小型水槽を用いたエアークッション型浮体の波浪中弾性挙動に関する実験的研究
- 更井 順則 (大塚) : 室戸岬沿岸藻場にかかる魚類による食圧の推定
- 塩崎 拓平 (奥野) : 西部熱帯太平洋海域における植物プランクトンの鉛直分布特性
- 柴田 真夫 (池田) : 急潮流中スパーブイの不安定運動低減に関する研究
- 申 東燮 (細田) : 大阪湾沿岸域に住む人々の環境意識調査とその分析
- 鈴木 宏始 (池田) : 超小型滑走艇模型を用いた抵抗試験法の開発
- 畳谷 龍人 (田原) : マルチブロック格子を用いたセールシステムの格子生成とCFD解析  
— Downwind セールへの Grid 生成と格子評価 —
- 谷本 望 (奥野) : オロイド翼まわりの流れに関する実験
- 橋本 卓 (姫野) : CFD を用いた Stealth Destroyer 周りの流場計算及び不確かさ解析
- 畠山 薫 (岸) : 新造船発注オプションの制度設計
- 福島 寛司 (岡田) : 緊張係留式没水平板の波浪中弾性挙動に関する実験的研究
- 丸谷 潤一 (岡田) : 極限波浪中における緊張係留式海中トンネル構造体の強度評価に関する研究
- 見方 直昭 (大塚) : 螺旋状突起物をつけた円柱に働く流体力に関する実験的研究
- 水口 直 (姫野) : 波浪中の推進性能と船体形状の最適化問題の考察
- 南出 和都 (奥野) : 沿岸域生態系モデルの数値シミュレーション — MEC モデルを使った計算 —
- 安田 弘文 (姫野) : 遺伝的アルゴリズムの改良と船型設計問題への応用
- 湯本 譲司 (岸) : 粘弾性流体の挙動に関する実験的研究
- 横井 義光 (正岡) : 複合荷重を受ける海中パイプラインの崩壊挙動に関する研究
- 渡辺 皇介 (細田) : 多変量解析によるヒューマン・ファクターと乗り物酔いの関連 — 船酔い耐性アンケートの結果より —
- 仲井 隆良 (田原) : マルチブロック法を用いた車体周りの流場計算
- 中谷 聡 (岸) : 緑藻の光合成への超音波ストレスの影響に関する研究 — 実験計画法によるアプローチ —
- 松井 友寿 (正岡) : 3段3重試験における鋼材の引張疲労過程の追跡  
— 温度およびヒステリシス・エネルギー挙動と疲労寿命の関係について —
- 池田 岳平 (細田) : 脳機能画像計測・解析システムの船舶における利用可能性に関する調査
- 宇根岡 亨 (大塚) : マナマコを用いた底質改善に関する研究

塩崎 拓平 君は  
日本造船学会奨学褒賞  
を受賞

南出 和都 君は  
日本造船学会奨学褒賞  
および本学学業優秀賞  
(白鷺賞)を受賞

松井 友寿 君は  
海洋システム工学科賞  
を受賞